(3) 織田信長書状

〔元亀元年（一五七〇）　遊佐〔信教〕　宛〕

其表之趣、如何候哉、
徳川三河守着陣候、
向近江□候丹羽
木下已下も令
渡湖候間、徳川ニ
相加、東福寺清水
栗田口辺ニ可執
陣候、敵淀川を越候□、
間近寄候者、此表
儀者、志賀勝軍
□残人数、
信長即時□
可討果、敵働
様子被見届、可
被合手候、為其
申送候、恐々謹言、

十月二日　信長（花押）

遊佐□

読み

其の表の趣、如何に候哉、徳川三河守（家康）着陣候、近江に向かい□候丹羽（長秀）・木下（秀吉）已下も湖を渡らしめ候間、徳川二相加え、東福寺・清水・栗田口辺二陣を執るべく候、敵淀川を越し候□、間近に寄り候はば、この表の儀は、志賀・勝軍に□人数を残し、信長即時□討果すべし、敵の働きの様子を見届けられ、手を合せらるべく候、其の為に申し送り候、恐々謹言、

十月二日　　信長（花押）

遊佐□

意味と解説

その表（大坂方面）の様子はいかがでしょうか。（こちらは）家康が応援のために着陣しました。（長浜・横山城にいた）丹羽長秀と木下秀吉に湖（琵琶湖）を渡らせ、家康に加わって（京都東部の）東福寺・清水・粟田口に陣を取ることにします。敵が淀川を越えて（そちらに）攻め寄ってくれば、志賀（大津）や勝軍地蔵山（京都左京区）に軍勢を残し、（近江にいる）信長自らが出陣して討ち果たすつもりです。敵の動きを監視し応戦して下さい。そのためにこの手紙を届けました。

宛先の遊佐（ゆさ）は、河内の畠山昭高（あきたか）の重臣の遊佐信教（のぶのり）と思われます。家康の着陣や京都周辺の動きから元亀元年（一五七〇）のものとされます。